

目的 前報に続いて、昭和46年から昭和63年の家庭科教育の内容が、社会の変化に対応してどのように変化してきたかを考察するとともに、新しい学習指導要領のもとで、被服教育はどのような内容にしていけばよいかを考える。

方法 昭和43、44、45年と、昭和52、53年に出された小・中・高校の「学習指導要領家庭科編」における被服分野の内容を検討し、前報との異同を明らかにした。さらにこの時期の社会状態とのかかわりをみるために、雑誌「主婦の友」及び「暮らしの手帖」の衣生活関連記事と対応させて検討した。また指導の実際について、奈良県における家庭科教育研究会、家庭クラブ連盟の研究の状況、及び雑誌「家庭科教育」を参考にした。

結果 昭和43、44、45年に小・中・高校の内容に入れられた「既製服の選択」は、昭和52、53年の改訂版ではなくなり、中学校では「取り扱い表示記号」、高校では「着装」「被服デザイン」が大きく取り上げられた。また、衣生活の「合理化」は「充実向上」と変えられ、時代の要請の変化を示している。この時期の雑誌には「おしゃれ」や「着こなし」の記事が毎月掲載され、「既製服のサイズ」「ブラジャー、ガードルの選び方」「マフラーとストール」など洋服の着装に関するものが多い。男子や子供の着こなしにも関心がもたれ、「男の装い」「コーデイネイト子供服」などの記事がみられる。こうした社会の状況に対応して、今後の被服教育の内容は、「着る」「脱ぐ」「買う」「作る」といった衣生活行動を理解させた上で、個人や家族の被服に関する諸場面に対応し得る力をつけることの出来るものにしていくことが必要であると考えられる。